

古墳時代後・終末期の装飾馬具と装飾付大刀 における貴金属の使用について

古川 匠

1. はじめに

筆者は、以前に古墳時代後期の装飾馬具の生産体制を考察した事がある^(註1)(以下、旧稿)。6世紀代の馬具には、本体に金銅装が施されるが、馬具本体の組み立てと、馬具本体の革帯への固定とに用いられる鋌には銀張りが施される事から、金銀の色彩的コントラストを意識した装飾馬具製作が推定される。この色彩的な特徴は、内山敏行氏の馬具編年の後期3段階(須恵器編年のTK43~TK209型式期)にほとんど消滅し、馬具と鋌の色彩は金一色あるいは銀一色へと変貌する。そして、この変化は、5世紀後半から6世紀後半にかけて装飾馬具の主流である、f字形鏡板付轡・劍菱形杏葉が消滅し、代わって、棘葉形意匠や心葉形意匠の馬具が主流になると同時に見られる変化である。以上の点を、旧稿では論じた。なお、筆者のこの視点は、内山敏行氏によっても指摘されており、内山氏は、鋌や貴金具を金銅で装飾する技法が千賀久氏の分類による「新羅系馬具」^(註3)に伴う、と表現している^(註4)。

馬具の意匠と装飾に用いられる貴金属の変化は、古墳時代後期の装飾馬具生産における大きな画期であるが、また同時に、金、銀、銅といった貴金属の流通、利用の側面からも、大きな画期と考えられる。金銅製作は水銀アマルガム技法によって為され、金、銅、水銀の供給が必須であるが、対照的に、銀装の装飾馬具製作に必要なのは銀のみである。従って、完成品である馬具が金銅装のみ、もしくは銀装のみに一変する事は、装飾馬具発注者の要望の変化に留まる問題ではないだろう。

当時の倭においては、上記の貴金属は列島内で産出されておらず大陸からの輸入に頼っており、装飾馬具製作工房、そして同様に貴金属を用いる、冠や耳飾、装飾付大刀等の製作工房までの経路は、その希少性と重要性から強固かつ安定的に管理されていた、と推定される。貴金属流通とその管理については、古墳時代から律令期への変革期にあたる倭の体制を検討する上で重要な問題の一つと考えられる。この視点については、装飾馬具と同様に金銀装の装飾付大刀の装飾技法^(註5)の分析からも検討が可能である。装飾付大刀、装飾馬具は、日本列島の幅広い地域で出土しており、詳細かつ広範な検討が必要ではあるが、本稿ではその第一歩として、京都府の後期古墳出土資料を中心に、装飾付大刀、装飾馬具に

用いられる貴金属使用の実態を検討してみたい。

2. 京都府下出土の主要装飾馬具

京都府出土の主要な装飾馬具は、別表のとおりである。京都府は近畿地方の中でも馬具の出土が少ない府県とはいえ、この少ない事例においても、5世紀段階には鉄製馬具あるいは金銅装馬具が主体であるが、5世紀後半(TK23型式期)以降に、金銅装馬具本体に銀装鉾が装着されるセットが主体となる事がわかる。そして、6世紀後半から末段階(TK209型式期)以降になると、金銅装の馬具本体と金銅装鉾のセットが主体となる事もまた明らかである^(注6)。この傾向は、ほぼ汎列島的に見られる現象である。

装飾馬具に装着される鉾は、重要な役割を担う。鉾は、その機能から2種類に分類できる。即ち、(1)馬具本体の組み立てに用いられる鉾と、(2)馬具本体を革帯に固定するために用いられる鉾である。日本列島の装飾馬具は、韓半島から新たな意匠がもたらされるたびに種類を増やすが、各意匠の馬具で、日本列島での出現期のセットに装着される鉾を見ると、(1)と(2)の鉾は規格が異なる傾向が強い。すなわち、馬具本体を製作する段階と、馬具本体を帯に装着する段階とで、異なる鉾を用いている事が分かる。ある意匠の馬具が日本列島に定着する段階になると、(1)と(2)の鉾は規格が統一されるようになるのである。旧稿では、この段階を国内での製作が定着化する段階、すなわち「国産化」の段階ととらえた。

装飾馬具の鉾をさらに見てみると、5世紀後半頃のf字形鏡板付轡と剣菱形杏葉を中心とするセットには、金銅装の馬具本体と銀張鉾との組み合わせが見られるようになる。6世紀前半段階になるとこの組み合わせは多くの装飾馬具に敷衍し、f字形鏡板付轡、剣菱形杏葉、楕円形鏡板付轡、楕円形杏葉、鐘形鏡板付轡、鐘形杏葉に認められるようになる。この段階には、上記の馬具本体の製作に際して多量の鉾が打たれるようになるが、各々の鉾頭には銀が張られる。そして、複数の馬具が組み合わされて構成される馬装1セットで用いられる銀張鉾は優に数千個を数える数量となる。したがって、この時期の馬装を作り上げる為の材料として、本体を構成する鉄は言うに及ばず、装飾的価値の付加を目的として本体に張られる金銅板を製作する為に必要な金、銅、水銀、そして、鉾頭に張られる多量の銀も必要なのである。また、6世紀前半には、前段階までその分布範囲が限定的であった金銅装の装飾馬具が列島各地の中規模以上の古墳で見られるようになる。飾り馬、装飾馬具への社会的需要の高まりに応える為、装飾馬具が大量に製作された時期である。当然、装飾馬具の製作に係る金、銅、銀の消費量も突出して多くなったはずであり、それが可能となった背景には、安定的な貴金属の供給が想定されるだろう。

付表 京都府出土主要装飾馬具

古墳	時期	鏡板			杏葉			辻金具・雲珠		飾金具	
		型式	本体	鍔	型式	本体	鍔	本体	鍔	本体	鍔
宇治二子山		f字形	鉄		剣菱形	鉄		鉄		鉄	
トゾカ古墳	TK23	f字形	金銅	銀	剣菱形	金銅	銀	-	-	-	-
物集女車塚	MT85	f字形	金銅	銀	剣菱形	金銅	銀	金銅	-	-	-
鹿谷18号A	TK43	f字形	金銅	銀	剣菱形	金銅	銀	金銅	銀	金銅	銀
鹿谷18号B	TK43	棘葉形	金銅	銀	棘葉形	金銅	銀	金銅	銀	-	-
牧正一	TK43	十字文透	金銅	金銅	心葉形	金銅	金銅	-	-	-	-
弁財1号	TK43～TK209	十字文透	金銅	金銅	-	-	-	金銅	金銅	金銅	金銅
湯舟坂2号	TK43～TK209	環状	鉄	-	-	-	-	-	-	金銅	金銅
桃谷1号	TK43～TK209	環状	鉄	-	-	-	-	-	-	金銅	金銅
岡1号	TK43～TK209	環状	鉄	-	-	-	-	-	-	鉄	金銅・銀
西外1A	TK209	-	-	-	鐘形	金銅	金銅	-	-	-	-
西外1B	TK209	心葉形	金銅	金銅	心葉形	金銅	金銅				
奉安塚	飛鳥1	棘葉形	金銅	金銅	棘葉形	金銅	金銅	金銅	金銅	金銅	金銅

馬具に見られる金銀のコントラストは、TK43型式期段階になると大きな変化を見せる。すなわち、金銅装の本体には金銅装の鍔が、銀装の本体には銀装の鍔が装着されるようになるのである。外見だけではなく、装飾馬具工房への貴金属の供給体制の変化をも示す事象と解釈できよう。では、古墳時代後期の金銀装製品として装飾馬具と並立する装飾付大刀を含め、貴金属の使用状況を検討してみると、どのような傾向が読み取れるのであろうか。

3. 京都府下を中心とする装飾馬具と装飾付大刀の共伴例

京丹後市久美浜町の湯舟坂2号墳では、金銅装双龍環頭大刀、銀装圭頭大刀が出土している。金銅装双龍環頭大刀は、金銅製の柄頭をはじめとして、鏝、鞘金具等のほとんどの金属製外装部品が金銅装であるが、柄木の筒金具には銀板が用いられている。銀装圭頭大刀は、対照的に金属製外装部品が銀装である。しかし、柄頭紐通孔には銅製品が用いられ、足金具は銅地銀装製品である。馬具はイモ貝装辻金具、雲珠を中心とし、金銅装飾金具を含む馬装1セットが復原される。装飾付大刀、装飾馬具は奥壁付近に多量の須恵器と共に集積されていた。奥壁付近の須恵器の型式はTK43～TK209型式期で、初葬、追葬段階の遺物が、さらにその次の段階の追葬時に片付けられた、と考えられる。従って、装飾付大

刀と装飾馬具には時期差が存在し得る。資料の編年については、双龍環頭大刀は新納泉氏の編年の第6段階にあたり、TK209型式期と位置づけられる。奥壁の環状鏡板付轡は岡安光彦氏の編年の第3段階にあたり、これはTK43型式期に位置づけられる。装飾馬具と装飾付大刀は、出土状況からの前後関係は不明であるが、遺物の編年では装飾馬具の方がより古い段階の資料と位置づけられ得る。

京丹後市峰山町桃谷1号墳は、横穴式石室に4体の埋葬が想定される。出土位置はほとんど乱されておらず、金銅装大刀が2点出土している。環頭の型式が不明な1点(大刀1)は、金銅板の鍔、釧が用いられ、鞘金具にも金銅板が用いられている。そして、柄間には、刻み目のある銀線が葛巻にされている。金銅装圭頭大刀(大刀2)はほぼ同じ造りであるが、柄間に葛巻の痕跡はない。柄頭は外郭と内部の両方が金銅板から成形されている。馬具では鞍金具と環状鏡板付轡を中心とするセットが出土している。このうち、辻金具、革金具が金銅装であるが、辻金具は金銅板一枚作りで、脚部には金銅鉾が装着されている。革金具は鉄地金銅張で鉾は鉄地金銅張ないし金銅鉾である。桃谷1号墳では4体の被葬者が確認され、装飾馬具は奥壁付近でまとまって出土している。装飾付大刀の副葬位置は各々異なるが、大刀1については、装飾馬具に隣接して出土しており、同一被葬者に係る副葬品と評価できる。

京丹後市網野町岡1号墳では、単鳳環頭大刀が出土している。環頭を始め、柄金具、鞘金具が金銅製であるが、柄間には銀線が葛巻されている。馬具としては、ほぼ完形の環状鏡板付轡、鍔金具等が出土している。このうち、革金具は鉄製であるが、金銅装の鉾が装着される舌状の金具と、銀装の鉾が装着される正方形の金具がある。金銅装と銀装の鉾が単一の馬装内で用いられているが、TK43型式以前まで通有の、金銅装の金具本体と銀装の鉾の組み合わせではない。6体の遺体が確認されているが、出土状況からは単鳳環頭大刀が奥壁沿いの被葬者に伴うのに対し、馬具一式はそれよりやや手前の被葬者に伴う。このように装飾付大刀と装飾馬具の副葬位置は異なるが、副葬品配置はほとんど乱されておらず、また、各被葬者に伴う須恵器の型式には時期差が無いことから、装飾馬具と装飾付大刀は、ほぼ同時期の副葬と考えられる。

京都府出土資料の検討から、TK43～TK209型式期には、金銀装の装飾付大刀と金銀装の装飾馬具とが共伴せず、金銀装の大刀と金銅装の馬具が出土する傾向が指摘できる。ここで、同時期の他府県の主要古墳を見てみると、金銀装の装飾付大刀と、金銅装の装飾馬具が共伴する事例として、群馬県綿貫観音山古墳、奈良県烏土塚古墳、同珠城山3号墳、鳥根県岡田山1号墳、同御崎山古墳が挙げられる。

ただし、この傾向にあたらぬ資料もある。奈良県藤ノ木古墳では、金銀装の装飾付大

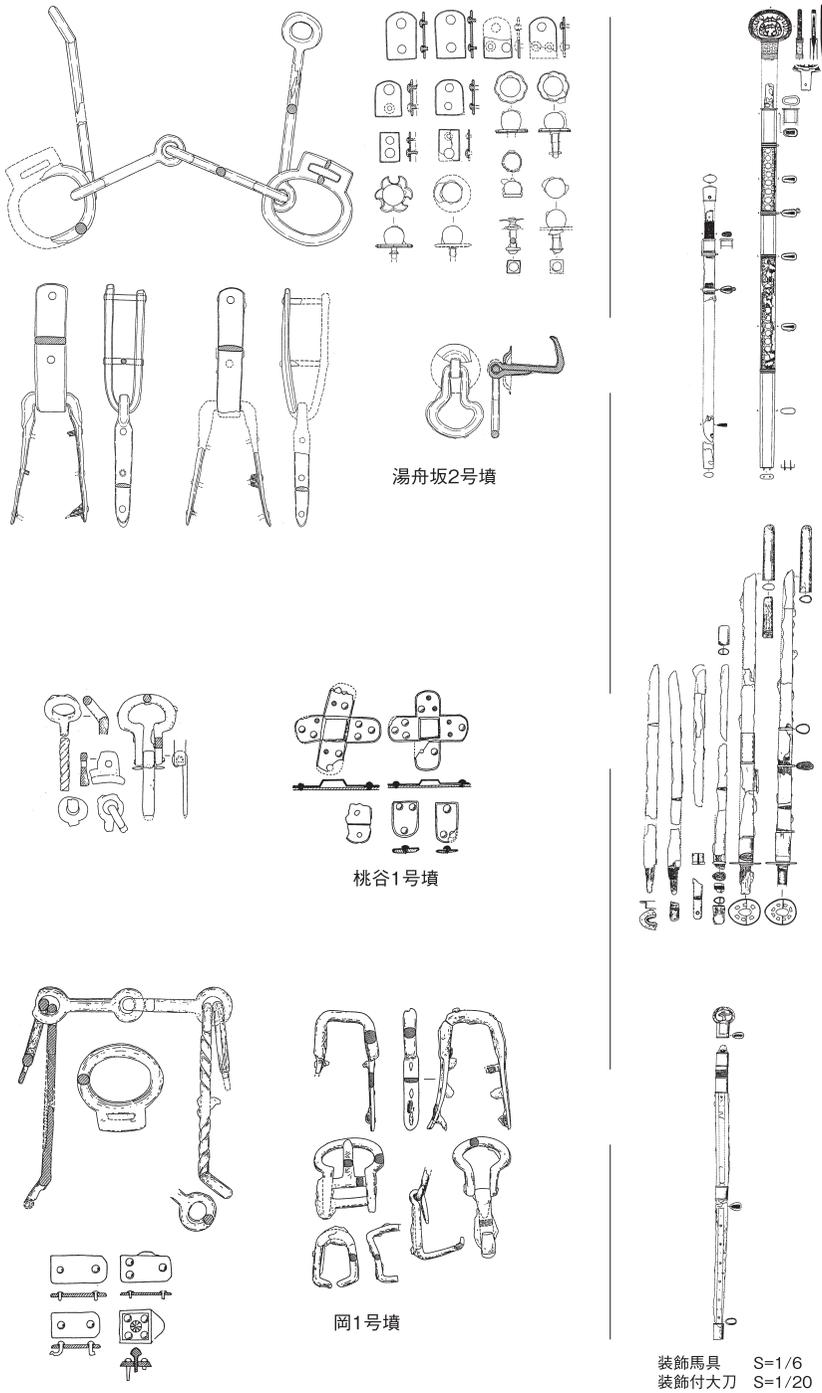


図 京都府内の装飾馬具・装飾付大刀共伴例

刀と、金銅装の心葉形鏡板付轡、棘葉形杏葉から構成される豪華な馬装が相伴している。ただし、もう1セットの、鐘形鏡板、杏葉から構成される馬装では、金銅装の馬具本体に銀装の銚が装着されている。鳥根県上塩冶築山古墳では金銀装の装飾付大刀と、金銀装の十字文透心葉形鏡板付轡を中心に構成される装飾馬具1セットが相伴している。

装飾馬具の意匠と金銅装、銀装の関係について概観すると、棘葉形杏葉、心葉形透鏡板付轡、同杏葉の外観は金一色ないし銀一色を呈する傾向が顕著である。これに対し、TK43型式期以前から存在する鐘形意匠の馬具は、藤ノ木古墳資料がそうであるように、従来の金銅装本体と銀装銚の組み合わせがやや遅くまで残っている^(註9)。十字文透心葉形鏡板付轡はTK43～TK209型式期の短期間に盛行する馬具であるが、初現期の奈良県三里古墳こそ金銅装の馬具本体に銀装銚が装着されるものの、それに続く資料は本体、銚ともに金銅装である。上塩冶築山古墳の馬具は十字文透心葉形鏡板付轡の初現期のセットであり、辻金具、雲珠の造形も他の古墳出土資料と比べると格段に丁寧な造りである。従って、この意匠の馬具が定着する以前の、他の後出する資料とはやや異質な資料と位置づけられる。

4. まとめ

京都府出土資料を中心として、TK43～TK209型式期、すなわち6世紀後半から7世紀初頭における装飾付大刀、装飾馬具に用いられた金銀の装飾の対比を行ったが、この段階の装飾付大刀、特に環頭大刀を見ると、外装が金、金銅装を中心とする大刀であっても、柄間金具等に銀装が行われ、金、銅、銀といった複数種類の貴金属が用いられる傾向が看取できる。一方で、装飾馬具を見ると、少数の資料を除くと、単一セットの装飾に用いられる貴金属の種類は限定される傾向にあるようである。この時期の装飾馬具の製作工房に供給される貴金属が限定されるのに対して、装飾付大刀の製作工房への、金、銀、銅といった複数種類の貴金属の安定的な供給が想定できる。

ただし、この後装飾付大刀にも生産の画期が訪れる。大谷晃二氏によると、TK209型式期の装飾付大刀には、各種大刀の拵えに共通する部品が採用されるようになる、という^(註10)。また、金、銀が部分によって使い分けられていたものがほぼ全体を金銅板のみで装飾するようになり、佩用方法も吊り金具による2足佩用に統一されるようになる、という。この装飾付大刀の画期については、これまで各論者によって、規格的な装飾付大刀の生産体制が倭政権のもとで確立した時期として、重要視されている^(註11)。

装飾付大刀の製作技術、意匠、生産体制の変遷に関しては、先学による膨大かつ精緻な研究蓄積があり、現在の筆者の力量に余るため、本稿では触れない。ただし、少なくとも、装飾馬具に見られる貴金属使用の限定的使用が^(註12)、装飾付大刀に於いてやや遅れて見られる

ようになる事は確かである。日本列島での生産が可能となったTK43型式期以降、装飾付大刀の出土量は増加する。言うなれば、装飾付大刀に対する志向性が強くなる時期である。TK209型式期に顕著となる貴金属の限定的使用は、単龍、単鳳大刀の消滅とそれに入れ替わる意匠の隆盛、そして装具の齊一化とほぼ同時に達成される。一方で、TK43型式期には、装飾馬具は中心的な意匠が大きく変化し、新羅系の心葉形意匠、棘葉形意匠の馬具が中心となる。これらの新羅系の装飾馬具は、少量ながらTK10型式期に登場しているが、既に出現期からほぼ全ての資料で、装飾の色彩的効果が馬装内で金一色に統一されている。f字形鏡板付轡、剣菱形杏葉を中心とする5世紀後半以来の主流意匠とは別個の色彩感覚を想起させるのであるが、これらが主体となるTK43型式期以降は、金銀のコントラストを重視する従来の意識は根本から覆され、貴金属の使用を含めた、装飾馬具生産体制の再編成が為される。意匠と貴金属の変化という点から見ると、装飾付大刀と装飾馬具の様相は近似している。一方で、装飾付大刀と対照的に、TK43型式期以降、装飾馬具の出土量は急減しており、生産量の低下が想定される。

装飾付大刀と装飾馬具とでは、同時期の生産量の消長は合致せず、TK43型式期までの装飾馬具の生産に要した物量、人的資源、労力は、以降、装飾付大刀の生産へと、傾注されているかのようである。とはいえ、TK209型式期に単一的な色彩効果が両資料に共通して見られるのも事実である。この背景としては、上記のように、装飾馬具、装飾付大刀の生産体制の個別的な変化が要因であり、装飾馬具、装飾付大刀と「畿内」の有力氏族との密接な関係を想定すれば、こうした背景には「畿内」の大規模な政治的変動を考慮するべきであろう。また、視点を変えると、倭政権による貴金属管理の強化といった側面もあるだろう。そして、装飾馬具と装飾付大刀とに短期間ながら時間差を伴って達成された事は、貴金属管理の強化が段階的に為された事を示す現象として評価できる。より詳細な検討を別に期したい。

(ふるかわ・たくみ=当調査研究センター調査第2課調査員)

注1 古川匠「6世紀における装飾馬具の「国産化」について」(『古文化談叢』第57集)2007

注2 内山敏行「古墳時代の轡と杏葉の変遷」(『黄金に魅せられた倭人たち』島根県立八雲立つ風土記の丘資料館)1996

注3 内山敏行「金銅装馬具と銀装・金銅装の部品」(『季刊考古学』第106号)2009

注4 千賀久「日本出土の『新羅系』馬装具の系譜」(『東アジアと日本の考古学』Ⅲ)2003

注5 金銀装の装飾がなされる大刀と馬具について、本稿では、前者を「装飾付大刀」、後者を「装飾馬具」と呼称する。

- 注6 あくまで、主体となるのであって、一部には例外が存在する。例外的な資料については、特注品、舶載品、他の馬装に供する為に製作された馬具(=部品)の転用等が推測される。
- 注7 新納泉「戊辰年銘大刀と装飾付大刀の編年」(『考古学研究』第34巻第3号)1987
- 注8 岡安光彦「いわゆる「素環の轡」について—環状鏡板付轡の型式学的分析と編年」(『日本古代文化研究』第2号)1985
- 注9 拙稿「6世紀における装飾馬具の「国産化」について」前掲
- 注10 大谷晃二「上塩冶築山古墳出土大刀の時期と系譜」(『上塩冶築山古墳の研究』鳥根県古代文化センター調査研究報告書4)1999
- 注11 町田章「環刀の系譜」(『奈良国立文化財研究所学報28(研究論集3)』)1976
新納泉「単竜・単鳳環頭大刀の編年」(『史林』65巻4号)1982
穴沢味光・馬目順一「単龍・単鳳環頭大刀の編年と系列—福島県伊達郡保原町愛宕山古墳出土の単龍環頭大刀に寄せて—」(『福島考古』第27号)1986
松尾充晶「装飾付大刀の評価と諸問題」(『かわらけ谷横穴墓群の研究』鳥根県古代文化センター調査研究報告書10)2001
菊池芳朗『古墳時代史の展開と東北社会』大阪大学出版会 2009
などが挙げられる。
- 注12 ただし、外装が金ないし銀一色であっても、使用される貴金属は外見と直接関係するものに完全に限定されるわけではない。例えば、装飾付大刀の部品のろう付けに銀が、そして銅地銀装の下地として金が用いられる事が知られている。
とはいえ、用途から想定される使用量は微量であり、前段階の金銀装と比べると、主体的に使用される貴金属の量、種類は確実に限定されるのである。
関連研究として、
橋本英将「金銅装頭椎大刀から検出されるAgの解釈」(『遠古登攀』遠山昭登君追悼考古学論集)2010 がある。本稿脱稿後に刊行されたため、橋本氏の研究成果を本文に反映できなかったが、装飾付大刀の「色味」の遷移の段階を検討されており、本稿の視点と直接関連する研究である。今後の展開に注目したい。

挿図出典

- 湯舟坂2号墳：久美浜町教育委員会『湯舟坂2号墳 久美浜町文化財調査報告』第7集 1983
桃谷1号墳：京都府教育委員会『京都府文化財調査報告』第廿二冊 1961
岡1号墳：京都府教育委員会『京都府文化財調査報告』第廿二冊 1961